

<実践報告>

教育学部と附属学校における相互支援のあり方  
—合唱指導・歌唱指導において—

池田京子 信州大学教育学部芸術教育講座

田島達也 信州大学教育学部芸術教育講座

Mutual Support Between the Faculty of Education and Its  
Affiliated Junior High Schools  
— Through Vocal Lessons and Chorus Lessons—

IKEDA Kyoko: Department of Music and Fine Arts, Faculty of Education, Shinshu University

TAJIMA Tatsuya: Department of Music and Fine Arts, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	これまで信州大学教育学部附属学校で行われた、学部声楽教員による授業支援、全校合唱での指導や、教育学部で行われている合唱に関わる授業内容について報告すると共に、これらによってもたらされる成果や、学部と附属の相互支援のあり方について考察することを目的とする。
キーワード	音楽教育 合唱指導 歌唱指導 声楽 相互支援
実践の内容	主に附属中学校で行われた、学部声楽教員による授業支援、全校合唱での指導、附属学校教員への指導、教育学部で行われている合唱指導の授業実践。
実践者名	池田京子 田島達也
対象者	附属学校児童・生徒 学部学生 附属学校教員
実践期間	2002年5月～2006年6月
実践研究の方法と経過	学部声楽教員による附属学校児童・生徒への合唱指導は、これまで過去10年間にわたり実践されてきたが、本稿では2003年から2006年にかけて行われた、主に附属中学校における合唱指導、附属教員へ専門的スキルの指導、その実践を経て行われた学部での授業内容の実際を取り上げた。
実践から得られた知見・提言	附属学校で行われてきた、学部声楽教員による授業支援や、全校合唱での指導、附属学校教員への指導は、子どもたちが専門的立場からの具体的な指導を受けられるというメリットがあるばかりでなく、附属学校の教員にとっても、歌うための基礎的な呼吸法、発声法、発語法など、声楽家の専門的技術や指導法を学べるといった点で有益である。一方学部声楽教員にとっても、発声に関わる音生生理学的観点からの理解や、それに関わる適切な指導用語の使い方によって、学校現場の歌唱指導が一層改善される可能性を知ることになり、それが学部における教員養成の段階で、何を習得させておくべきかの見直しを迫ることにつながった。

## 1. はじめに

一般に、大学の教員が小・中学校の授業や全校集会の場で、児童・生徒に直接指導することは、きわめて例外的なことである。しかし教員養成を主な目的とする教育学部と附属学校という場においては、児童・生徒が専門的立場からの具体的な指導を受けられるというメリットがあるばかりでなく、附属学校の教員にとっても、その専門的スキルや指導法といった点で、また、近い将来教員となる学生の教育にあたる大学教員にとっても得るところが多く、互いに切磋琢磨できる良い機会となり得る。

信州大学教育学部では、1997年頃から、附属学校の授業の場で、あるいは全校集会の場で、児童・生徒に歌唱指導や合唱指導をするなど、学部音楽科の声楽教員が附属学校での合唱指導、歌唱指導を行ってきた。こうした指導は、附属学校における音楽科のクラス授業、学年合唱、全校合唱、クラブ活動の場で実践され、歌唱指導や合唱指導の支援において、一定の教育的成果をあげてきた。とりわけ合唱指導は年に数回ずつ行われ、平成14年度の附属松本中学校に限った記録だけでも、年6回に及んでいる。これらの実践は、附属学校教員や児童・生徒への支援という枠にとどまらず、学部教員にとっても有意義なものとなり、その成果は学部における声楽演習、歌唱指導法、合唱法等の授業に、大きく反映されている。

本稿は、「信州大学教育学部・附属共同研究報告書(2003)」と「学部教員による附属長野中学校における授業支援—3年間の実践研究報告書—(2006)」に発表された報告書をもとに、これまでに行われた附属学校での授業支援、全校合唱での指導を総括し、新たに、学部で行われている合唱に関わる授業内容について報告すると共に、これらによってもたらされる成果や、学部と附属の相互支援のあり方について考察するものである。

## 2. 附属中学校の授業における合唱指導

学部声楽教員による附属学校支援はこれまで、附属長野中学校、附属松本中学校、附属松本小学校において行われており、内容は合唱指導を中心としたものである。その形態は年によって異なり、クラス授業、学年合唱、全校合唱、クラブ活動、個別の指導など様々である。取り上げた作品は、教科書に掲載されている歌唱教材、副教材をはじめ、ヘンデル作曲「メサイア」やハイドン作曲「天地創造」等の大曲まで多岐にわたっており、扱う言語も日本語、ドイツ語、英語、ラテン語に及んでいる。

### 2.1 附属松本中学校における合唱指導

松本地区の附属学校園では、小学校と中学校において合唱指導の支援が行われているが、ここでは特に、平成14年度に附属松本中学校で行われた全校合唱での指導と、大学生との合同合唱について、その内容を述べることにする。

教材は島崎光正作詞、飯沼信義作曲による『信濃によせる合唱組曲・おいで光の子どもたち』より「讃歌」である。この作品は、同声二部(小学生)、混声三部(中学生)、混声四部(大学生)の三つのセクションに分かれた混声九部合唱曲で書かれており、子どもから大人

まで様々な世代の声を生かせる作品となっている。春には、附属松本中学校の公開授業に向けて、学部声楽教員による事前指導、秋には音楽教育分野の学生と中学生との合同合唱、また中学生と小学生との合同合唱などの支援を進めた。合唱活動に附属松本小学校が加わることにより、作曲家が本来意図した演奏形態をとることができた。すなわち、小学生の声、中学生の声、大人の声といった、それぞれのパートがその役割を果たすことによって成立するという、作品本来の持つ演奏形態である。

平成14年度は、次のようなスケジュールと内容で合唱指導が行われた。

- 1) 4月には教育学部において共同研究会を開催し、前年度の研究報告及び附属各校の研究内容の報告を行い、それに基づいて本年度の研究推進について検討した。その結果、本年度は附属松本小学校及び松本中学校の児童・生徒と共に「讃歌」を合同演奏することにした。
- 2) 5月に行われた附属松本中学校園公開授業研究会(中学校の部)において、中学生による「讃歌」演奏を、学部音楽科教員が聴くことにより、その状態を把握した。それにより、今後の指導ポイント、及び声部および楽器の編成を決定した。
- 3) 7月には、附属松本中学校の全校集会において、学部声楽教員による直接指導を行った。さらに、合唱クラブでの指導を行い、中学校教員への発声指導、呼吸法のポイント指導をも併せて行った。
- 4) 10月には、学部学生と中学生の間で、ビデオレターの交換を行い、練習状況及び意気込みについて相互の理解を形成した。
- 5) 11月の附属松本中学校公開音楽集会において、中学生による全校合唱を行い、大学生からの感想を聴取した。また大学生のみによる演奏を行い、中学生からの感想を聴取した。その上で、中学生と大学生による合同演奏を行った。
- 6) 12月、附属松本中学校において、附属松本小学校及び松本中学校の児童・生徒による合同音楽集会を開いた。
- 7) 12月14日(金)、長野市若里市民文化ホールにおいて、第37回信州大学教育学部芸術教育専攻音楽教育分野定期演奏会～附属松本小学校児童・附属松本中学校生徒とともに～を開催し、小学生による演奏、中学生による演奏及び大学生との合同合唱演奏を行った。

以上が平成14年度に附属松本中学校で行われた合唱指導の記録である。

次に、上述6)において挙げた公開音楽集会における合同演奏の、事前及び事後の調査結果(アンケート形式)の概略と、合同演奏の意義について述べる。中学生からは、「大学生の皆さんのように心を込めれば、少ない人数でも立派なものにできるのだと分かった」「大人だから声がすごい、ということではなくて、表現の仕方がすごく激しかった」「(感動で)びりびりするような歌だった」といった驚きと感動が大半を占めた。

一方、大学生は基本的に「聴かせてあげよう」という態度で公開音楽集会に臨んでいたが、その後の感想では「小さな体のすべてを使って、引っ張っていこうとする指揮者の女

の子の姿がとても印象的だった」「私たちの合唱を聴いて、中学生が純粹に感動してくれたことがうれしかった」「年齢などを越えて、1つの音楽を創り上げる意義を学ぶことができた」というように、思いがけない喜びを感じた表現が、多く寄せられた。

合唱組曲「讃歌」を取り上げることによって、ふるさと信州を歌い上げるという共感、小学生、中学生、大学生という年齢及び教育環境の異なる集団が、それぞれ同声二部、混声3部、混声4部という、互いになくってはならないパートナーとしての役割を演じつつ、得られる達成感、また、互いに触発され、単独の集団だけでは決して学ぶことができないものを、相互に、且つ直接的に得ることができたといえよう。このことは、合唱教育において教育上の効果が極めて大きいと思われる。また、こうした教育が可能となった背景には、「讃歌」という特殊な教材の存在も重要であった。

## 2.2 附属長野中学校における合唱指導

ここでは平成16年度、附属長野中学校第3学年の授業(学年合唱)において行われた合唱指導についてその内容を述べる。

この年はC. スタインがミサ通常文に作曲した合唱曲「グローリア」を歌唱教材として、3年生の学年合唱の指導を行った。指導内容は、発声法に関することと、音楽表現に関することの2点を中心に行った。

### 1)基本姿勢

中学生の演奏は、明るく前向きな気持ちで歌えており、声量も十分なものだった。しかし、高い音を中心に音程が下がり気味で、混声4部のハーモニーは必ずしも美しいといえるものではなかった。これには姿勢が大きく影響しているので、ここではまず、正しい発声法の基本として、姿勢の矯正を行った。足は肩幅くらいに開き、頭から足まで一直線になるように。また、顔はまっすぐ前を向き、胸を若干上に保つよう指示した。さらに模範唱等で、音を感じる位置を高く保つよう伝えた。これらの指導により音程の正確さが増し、声自体も、より輝かしいものとなった。

### 2)ラテン語の発音のコツと音楽表現

次に、発音と音楽表現に関する指導内容を挙げる。この歌のテキストはラテン語で書かれており、発音上のポイントをいくつか指摘する必要がある。例えば、「Gloria」の子音「l」の発音については、舌を上あごにしっかりつけること、それによりこの言葉の表現がより適切なものとなることを理解させた。また「Gloria」の母音「o」におけるアクセントへの配慮、その処理の仕方についても具体的に説明した。さらに、フレーズングや拍子感については、曲のはじめの4小節を取り上げ、音楽はどの音に向かっているのかを考えさせた上で、フレーズのつくり方を指導した。

### 3)その成果

今回指導した3年生の学年合唱は、全校合唱の場で模範唱として披露され、それが他の学年に大きな感動を与え、公開授業の全校集会における全校合唱に生かされることとなった。

この年は、男性(声)の学部声楽教員による「グローリア」を歌唱教材とした授業実践の他に、女性(声)の学部声楽教員による「赤とんぼ」を歌唱教材とした授業実践が行われたが、いずれも中学生の「より音楽的で美しい表現や、声そのものの美しさを追及したい」という気持ちを強く感じることができ、1時間程の短い指導ではあったが、彼らの演奏能力の成長を感じることができた。

### 3. 附属小・中学校合唱部における合唱指導

附属学校への支援としては、授業における支援と共に、要請に応じて、附属小学校や中学校合唱部に対する指導を行っている。もともと合唱が好きで集まってきている児童・生徒たちなので、彼らの「こうなりたい」「あんな声を出せるようになりたい」という欲求は強く、要求も高度なものであり、必然的にその指導内容は専門性の高いものとなっている。

ここでは平成17年度に附属長野中学校合唱部で行った合唱指導の内容を具体的に報告する。

#### 3.1 指導内容とその観点

平成17年度に取り上げた作品は、横山潤子作曲「花と一緒に」(平成17年度全国学校音楽コンクール課題曲)と、石井欽作曲『風紋』より第1章“風と砂丘”(同自由曲)の2曲である。前年度からの継続的な課題として声、とりわけその音色を、場面に応じてどう変化させるかということが挙げられていた。そして附属中学校の音楽科教員は、発声法の専門書を読み、優れた合唱指導者のビデオを見るなどして研究を重ねていた。学部声楽教員は力強い声と力んだ声の違い、かげりや色合いのある声とこもった声の違いなど、具体的に声を示すことで支援していった。こうした研究打ち合わせを数回行った上で、中学校で実際の指導にあたることとなった。

指導の観点は、次の3つである。

- ① 発声法、とりわけ女声の高音を出す時のテクニックとその留意点。
- ② 歌詞の内容への理解、さらにはそこに隠された精神的なものへの理解。
- ③ 歌い上げたい内容を実際にどう表現し、表出させるか。

①②については指導の際に、かなりの部分で解決できたが、③については若干改善されたものの、生徒たちはすっきりしない様子であった。歌の内容を背景や文脈、その精神を理解した上で「こう歌いたい」という願いをもったとしても、実際にそれをどう表現するかという問題である。この点については、コンクールの地区予選後も課題として残った。

この指導の一ヶ月後、長野市において「NAGANO 国際音楽祭」が開催され、学部声楽教員によるソプラノ・コンサートが行われた。それを鑑賞した中学生から寄せられた感想の中に、次のようなものがあった。「夏休みに(学部の)先生が言っていた『そう思って歌う』ということは、ただ思うだけじゃなくて本当にそう思っていることを顔の表情でも表現することなんだってことがわかった。だからいい声にするだけじゃなくて、それと同じくらい、表情も鍛えないと、音色の変化はうまれないんだということがわかった」というもの

である。歌詞の内容を的確に表現するために、音色の変化は必須である。その声の色を変化させるために「表情を鍛えなければ音色の変化は生まれない」という発見は、中学生らしいものであり、学部教員にとっては、新鮮な表現であった。

### 3.2 成果

こうした取り組みの結果、附属長野中学校は、この年、第72回全国学校音楽コンクール長野県大会金賞、関東甲信越地方大会金賞を経て、全国大会において銀賞を受賞するに至った。全国大会での銀賞受賞は、昭和63年に受賞して以来17年ぶりのことであり、単独の2位受賞は、学校創立以来初のこととなった。

ここでは何よりも附属学校教員自身の強い向上心、未知なるものへ挑戦する勇氣、意欲といったものを挙げねばなるまい。それまで吹奏楽の指導者として自他共に認められていた教員が、3年がかりで合唱教育に熱心に取り組んだ結果である。中学生の合唱指導において、声楽の専門性は必須ではないが、教師の音楽的資質、ことに声や楽器の音色を聴きわける耳、音楽性という音楽全体に関わる資質は、指導力に大きく影響していると言わねばならない。

## 4. 学部における合唱指導の授業実践

発達段階にあるとはいえ、本来しなやかで柔軟な声帯をもつ子どもたちに、的確な発声指導や歌唱指導のできる教員を育てるために、とりわけ大学における歌唱法や歌唱指導法、合唱法等の授業では、的確な指導力が身につくよう、学生に指導している。ここでは平成17年度に学部で行われた「合唱法」の授業内容を取り上げることにより、その実際を報告する。

### 4.1 「合唱法」

この年、「合唱法」の授業で取り上げた曲は次の4曲である。高田三郎作曲、混声4部合唱組曲『心の四季』から「風が」「雪の日に」。鈴木憲夫作曲、混声4部合唱組曲『地球に寄り添って』から「地球に寄り添って＝センスオブワンダー」。寺嶋陸也作曲、女声3部合唱組曲「風になりたい」である。「合唱法」では、次の3つの観点を念頭に置き、授業を進めた。

- (1) 音程、音色などを聴き分けることができる優れた耳の育成
- (2) 楽曲の構成、曲想、詩の内容を理解し、表現できる力の育成
- (3) 呼吸法、発声法、指揮法等の専門的スキルの育成

以下、この3つの観点について述べる。

#### (1) 音程、音色などを聴き分けることができる優れた耳の育成

音程、音色などを聴き分けるためには、自分たちの音程や声色などを客観的に聴けることが必要となる。そのために、練習のときに何度か録音をとり、それを聴かせる方法をとった。これにより、音程についての問題点が明確となり、録音を聴いた多くの学生はうなずいたりして理解しているようだった。

## (2) 楽曲の構成、曲想、詩の内容を理解し、表現できる力の育成

楽曲へのアプローチ方法は様々あるが、歌唱教材には歌詞があるため、詩の理解や解釈が大切な要素となる。したがって、音程やリズムといった音楽の基礎的枠組みを構築した上で、歌詞の内容やその奥にこめられた意味を理解し、表現をふくらませ、音楽に盛り込んでいくというプロセスを経て楽曲を完成させていった。

## (3) 呼吸法、発声法、指揮法等の専門的スキルの育成

基本的な呼吸法や発声法の習得は、「歌唱法」や「歌唱指導法」の授業においても、指導しているが、ここではとりわけ子どもたちへの指導に役立つ「あくびをするように歌いましょう」「声は、息の上に乗せて出しましょう」等の指導用語について、注意を促した。あくびをするように口を開けると、なぜ声が堅くなりやすく、息の自然な流れにのった声になるかなどを、音声生理学の観点から理解出来るように指導した。

指揮法の技術の習得も、楽曲を作り上げる過程で欠かせない。様々な指示を与え、楽曲の完成度を高めるために、伝わる棒、身体表現等を個別に時間をかけて指導していった。

平成10年の学習指導要領の改訂に伴い、音楽科では、新たに箏や三味線といった日本の伝統楽器を取り扱うこととなった。しかし中学校音楽科で取り上げられている教材は、声楽に関わるものが圧倒的に多く、たとえば教育芸術社が平成17年発行の音楽科の教科書では、全体の3分の2が独唱・斉唱、あるいは合唱の教材となっている。このことから、教員を目指す学生の授業において、学部教員は、常に歌唱指導、合唱指導の授業改善を心がけ、これらの指導に一層力を注いでいかなければなるまい。

## 5. 附属学校教員と学部教員との連携による歌唱指導法改善への可能性

ここでは、これまで声楽を専門的に学んだことのない附属学校音楽科教員が声楽を専門とする学部教員から学んだことと、学部声楽教員が附属学校で直接指導することにより学んだことを、具体的に取り出して考察する。

### 5.1 附属学校音楽化教員が学んだこと

- (1) 歌唱時に必要な基本姿勢や深い呼吸、腹式呼吸に必要な横隔膜の使い方、息の支え方など、呼吸に関わるテクニックとその指導法。
- (2) 軟口蓋や喉頭筋群の構造と働きなど音声生理学的理論、及び喉の開け方、舌の位置、表情筋の使い方、声の方向性など、基本的な発声に関わるテクニックとその指導法。
- (3) 日本語の5母音を、声の響きや鳴り方を大きく変えないで、いかに区別させるか等、発語に関わるテクニックとその指導法。

具体的なテクニックの一例を紹介すれば、次のようなことである。「aeiou」の5つの母音を均等に響かせないと、レガート唱法(なめらかに歌うこと)ができない。また母音の響きの均一化を図らないと、歌詞が明瞭に聞こえてこないという不具合も起きてくる。例えば「i」の母音ばかりが堅く、強く鳴ったり、「e」の母音がうまく鳴ら

ずに、聞き手に届かないということはよく起きることであるが、これらを改善する具体的な指導、すなわち、「aiueo」(ひらがな順)や、広く一般的に行われている発声練習のように「aeiou」(アルファベット順)による発声指導ではなく、「uoa ei」(口型の自然な流れに即した順)による発声練習により、口唇がまるい「u」から、口の中の空間が広がる「o → a」へ、さらに、発語のポイントがだんだん狭く前の方へ移動してくる「e → i」へ誘導する、などのテクニックである。

(4) 変声期の子どもへの、ファルセット(裏声)を使った発声指導法。

## 5.2 学部声楽教員が学んだこと

- (1) 専門用語を分かり易い言葉に置き換えるなど、子どもの学齢にあった、伝わる言葉を研究することができた。そして、児童・生徒が理解できる言葉に置き換えることにより、声楽のプロフェッショナルとしてのスキルを、児童発声にも応用できることがわかり、それを実践することができた。
- (2) 中学生から寄せられる感想の中には、彼らが何を知りたいのか、また言葉になり難いイメージをどう伝えたら良いか、などを知るためのヒントがたくさん含まれており、それらを大学の授業改善に役立てることができた。

## 6. 今後の課題と総括

本稿では、学部声楽教員による附属学校における合唱指導や、附属学校音楽科教員への指導、その実践を経て行ってきた学部での授業内容の実際を取り上げた。また、これらの実践を行ったことは、中学生、大学生、附属学校教員、学部教員のそれぞれにとって、有意義なものであったことを具体的に示した。

国立大学が法人化され、人員削減、経費削減が迫られ、附属学校の存在が重荷になってきている教育学部が多く存在する中、附属学校は、教育実習校確保だけのためでなく、児童・生徒に対する直接指導する場、教員同士の協力支援等によってもたらされる臨時的な体験を得る場としても重要な意味をもっていることを今後も明らかにしていく必要がある。そしてこれらの実践を継続し、学部授業へのフィードバックをより充実させていくことは、さらに的確な歌唱指導、ひいてはより魅力的な音楽指導のできるスキルをもった教員を育てるために、必要不可欠なこととなろう。そのためにも学部と附属学校との相互支援態勢は、より強力なものにしていかなくてはならないと言えよう。

## 謝辞

本実践研究を進めるにあたりご協力下さった、信州大学教育学部附属長野中学校、附属松本中学校、附属松本小学校の教員、児童・生徒の皆さんに、心より感謝申し上げます。

## 文献

畑中良輔他編, 2005, 教科書 中学生の音楽 1, 2・3 上下, 教育芸術社

池田京子, 2003, 附属小学校児童・附属中学校生徒・学部音楽教育分野学生の合同演奏向  
けた合唱指導, 信州大学教育学部・附属共同研究報告書(平成 14 年度), pp. 104-106

池田京子, 田島達也, 2006, 合唱指導における附属授業支援のあり方 —声楽教育担当教  
員の果たす役割—, 学部教員による附属長野中学校における授業支援 —3 年間の実践  
研究報告書—, 信州大学教育学部, pp. 25-29

[Abstract]

The music department professors in the Faculty of Education, Shinshu University sometimes teach chorus classes at its affiliated junior high schools. It might be unusual for professors to teach at its affiliated junior high schools, but when they taught junior high school students about how to develop their vocal music skills, they taught by translating professional terms into easily understandable expressions. It seems that this practice had considerable effects on the vocal training of the junior high school students. Also, and more important, it seems that this practice created meaningful effects on the affiliated junior school teachers, the undergraduate students, and the professors themselves, because through this practice, the affiliated junior high school teachers could get the professional skills and find its teaching way, professors could realize how their expertise was put into practice at the junior high school level, and the undergraduate students could understand that whole process. This paper reports the details of how this practice was performed at the affiliated junior high schools and also shows a possible way to contribute to the improvement of music education in the undergraduate school.

(2006年6月30日 受付)